

911.3  
1

那智山一經抄 全

くせも哉翁

那をさし〜あぢい

草辭  
律山誌



練

祥

高榮  
藏書

とを世う〜毘耶居士の犬室よりたつひ  
深川よりあまたかこころをまは菴法をうて  
世より遠くすむ翁ありを里かた経は此男の  
まを成のよ〜津にかりておれおれと物と  
ら〜おろろ〜あぢい〜あぢい〜あぢい〜あぢい  
まの草を執ちて植て置て菴の名をけり  
ほひ母標はうに〜よひあまの天下を蕉の  
おれれと〜おれれと〜おれれと〜おれれと  
ま〜え〜あぢい〜あぢい〜あぢい〜あぢい

杖のほの或角流の料敷の扱ひ泉石の  
 をまひあつにせまもちを休せは貞亨の  
 秋此のほの或出してい世大和の間はあま  
 記行一篇あまもあ華のほのめに野あしを  
 心う志あてまへす一の建をせうよひま  
 燈あし一の記行よふまの運はうし一の  
 骸骨も影いし色をえ声あまくにほけてま  
 よあ綴よかふひてふく無常のむやあま  
 本来の面目あ又得る人うあはのたまう世

ろふはたもひまもわあ白くえれあ碑さ  
 金我すうくはと一はほあ人の塊あまう次  
 東出あぬれう跋はよりてまうくまあ心  
 のはほせまて今まへこのあにらまもほん  
 ちあ昔積翠老人ありて此池のあまあま  
 ろのあまを古人の詩論をころ休にひあま  
 台る詩のあまあまあやうの書はあま  
 あまうあ三化法あまあ人のあまあま  
 ちあああまて彼あ積ああまのあまあ

と長とくをよむと世にまへおほいあまの世にけ  
 能くはのあまのうつくしきあまの世にまへおほいあまの世に  
 此等のあまのうつくしきあまの世にまへおほいあまの世に  
 一と回好ましくいふと世にまへおほいあまの世に  
 百我もあまのうつくしきあまの世にまへおほいあまの世に  
 かくあまのうつくしきあまの世にまへおほいあまの世に  
 あまの光るあまのうつくしきあまの世にまへおほいあまの世に  
 一黙の雷はあまのうつくしきあまの世にまへおほいあまの世に

文化癸酉

随齋製書

有

文化癸酉  
 随齋製書  
 有



是之様子の由は不詳なり  
九年秋、月風、竹、意、之、流、行、也  
乃、自、新、元、年、紀、行、也

此紀行、貞享元年、中、之、桃、青、四、十、一、歳、  
乃、今、世、之、甲、子、今、以、之、題、也、  
事、之、由、記、也、風、國、の、集、也、  
と、も、又、人、少、之、主、也、安、永、九、年、秋、  
門、以、波、靜、再、板、也、之、世、題、也、許、六、滑、  
檣、傳、也、  
如、題、也、



野之——紀行翠園抄

○此紀行、貞享元年、中、之、桃、青、四、十、一、歳、  
乃、今、世、之、甲、子、今、以、之、題、也、  
事、之、由、記、也、風、國、の、集、也、  
と、も、又、人、少、之、主、也、安、永、九、年、秋、  
門、以、波、靜、再、板、也、之、世、題、也、許、六、滑、  
檣、傳、也、  
如、題、也、

千里由旅、之、路、糧、を、以、之、三、更、月、下、  
人、無、何、と、之、人、也、之、人、乃、杖、也、

○江湖風月集三山偃溪聞和尚の偈也

路不賚糧笑復歌三更月下入無何六

平誰整閑戈甲王庫初無如是刀

貞享甲子秋八月江上の破屋をいつる程

風の吹うそは秋寒の事也

那ささらしな心ふ風の志やうも哉

○山家集か「うらなみをささるのうらまはけ

ゆけといふまきか語か神ろそはつた

秋十とせううてはたをささる

○賈島詩「客舎并州已十霜歸心日夜

懷咸陽無端更渡桑乾水却望并州是

古郷たせ哉旧里伊賀を東武深川か住す

故み此感歎り

孫ふゆらら雨降る山皆雲みくられらる

霧くく連ふささるぬらう向らま

○深川の菴より書み富さるる菊根山

あやうて却て不不見をささる

何某あうとまらるるそはしそなたまけと

あうてあうとまらるる心をしとけり常み

莫逆の交みらるる朋友信らるる此人

○唐楊寧與陽城為莫逆交

深川やせ哉をささる古み秋なり

○たせとせ黄と富さみ秋なり

富士川のほとりをちりみくろくたうちなる捨  
 子孫表けぬ泣けり此川の早瀬めあけて  
 うき世の波を凌ぐふゆえに流るるの  
 静けさも捨おきし人小萩ももれ秋の風  
 々音やちりし人なすや志はまんと使わ  
 ぬお投てとちりしに

○源氏権ももみ初しちうく秋の山里

いもろく人小萩の流のかるたくれ○

撰集抄も法性寺願の清所の子を  
 小梅のきぬよつとみてお母ももも  
 ちうちうみくろく子孫やんかちりしに

いれぬ母と書く捨くろくを流るる  
 てまの後に於新無と成あ心とて傷  
 正良縁とちりしに

猿を聞人捨子小萩の風いふ

○白船集みくの字疑り依て白選も猿

をきいてと詠る○杜律 聽猿實下三聲

涙○所いぬもをてい物おもももきみ

ゆりこのもらう奇ちふくせせ

くろもや母父も悪まれの母ももれ  
 しんじつに母をたむむめいしんじつに母を  
 しんじつに母をたむむめいしんじつに母を



はらわのきをむまは

○本朝文鑑此文を採りて注曰推子也秋  
の風いさむを同しけていさむももも同  
しけり但し一辞をまゐる時ハ子殺の法  
極有と評ヤ富士川の流もまも浮世の  
浪もいびる此川まもまもまも  
小菰も流ハ源氏の歌とまもまも母の好ま  
ハ莊子も毛姓をいふ○素堂此評也  
士川の推子ハ惻隱の心もまもまも  
早瀬を枕とまも推子直人まもまも流  
とまもまもまもまも一別まもまも

あつらきみまも子ハあつら人まもまも  
はれまも昔お人の推子まも思まもまも  
まもまもまもまも

大井川越まもまも強まもまも

秋のまもまも江大井川新入大井川  
まも上冷

まものまも本様まも馬まもまもまも

○まもまの津まも山流まもまのまもまもまも  
まもまもまもまもまもまもまも

○滑稽傳也津まもまも破まもまもまも  
まもまもまもまもまもまもまも  
まもまもまもまもまもまもまも

ておて司このの木様とてみくられ  
とやさきとく ○ 朗詠集み松柏千年終  
是朽槿花一日自為榮下

あり給りの自らすにええと山の松陰と  
くききみと上み鞭をく多きと案甲し  
おのちとく人杜牧り早の抄夢小秋の  
中山みとくとく也とく

とめ舞て抄夢目とく 桑の烟

○杜牧早行 垂鞭信馬行  
林下帶殘夢葉落時忽驚霜凝孤雁廻  
月曉遠山横僮僕休辭險何時世路平

和系風瀑伊勢み在るを尋るは  
十とくとく足とく心標問ふ寸鉄をおし  
襟み一囊けけとみ十とく珠を推し  
僧と似て暮らして何と似て髪とく我  
何と似ていへとく浮屠の属みとく  
と神歩み入るをゆとく

○浮屠又浮圖也梵語也又曰塔婆譯曰

高頭按み寺院の通稱も用ゆ故り

僧のものをとくしとく

若くは宮み給て竹とくよ一の毒表  
の落しめとく流しとくみとく又上

あまの峰の如く身かむるは海を渡る  
たの記

みろ月をくちとせの松を抱ゆ

○素常譯女ゆきして山田・原の神松を

い<sup>地</sup>まゝにふしむるをいふもいふに似たり

おん一ちかよとく初めは一もいふもいふ

りぬ○西に物守神路山の松をらせ

峰の如く海裳川の流よるき海を

さしむる海松の松をいふもいふに似たり

かゝり松をいふもいふに似たり

くみ木の葉をいふもいふに似たり

光をいふの如くいふに似たり 神路山月を

いふに似たり

○梅をいふに似たり

いふに似たり

て松をいふに似たり

西に山の麓に流るる女も草をいふに

似たり

草は女をいふに似たり

○素常譯女をいふに似たり

かゝり松をいふに似たり

いふに似たり

其のひらききりる葉店かきまわつていふ  
といひたる女はうなよ敷くやうといふは  
結むていふよ申付たる

葉の巻物もよの翅めくたもたす

○左傳 卅蘭有國 番人服媚之 ○赤草紙

此句いゆる葉店のうりいもき体い  
たはすいゆるを老翁をえお、はめ也  
肉少清し家女料理持出る白を紙の  
女の曰ふは家の極女をういを今い  
の毒いれはく先のはも紙の  
極女を毒いし頃紙の葉因は

唯人萬物灵カレハ人利欲ヲ爭ヒ  
女色ヲ爭ヒ心ヲ猫ト同シ 爭害  
スルニ至ラハ虎狼ト同シ 孟子ハ  
人之所以異禽獸者殆希矣  
可畏甚也  
備前浦上村宗 三人如昔  
阿波三好實休 三人如昔  
姑夫ヲ殺シ其女ヲ奪ヒ是  
禽獸ニ等シキル者也  
拾遺漫筆

わらあまをえりけり白を紙の  
とをいふをいしきるまといひて  
みはるるはまのちかかしてつれ  
の老人のうよの葉の出つるの根  
といふ白をいしては白をいして  
物いふは名をいしてはかいて  
とく○按るははまの葉の人の心  
はるるはまの白をいしては人の心  
をいしてはまの白をいしては人の心  
をいしてはまの白をいしては人の心  
をいしてはまの白をいしては人の心

久米仙人、物洗ふ女のくまの白きとんぼく  
通る矢ひいん、いんもあまはるるも  
のきくうら小肥はうらつきもあまのあの色  
ちうとんもあまはるるも

閑人の夢舎をこして

芳樹をう竹四五本のほらうら

○聯珠詩格劉改之詩也翠竹無多第一

奇止憂喧暗俗人知清風自足老僧用

只是窓前欠好詩

長月の初古々よ海う北堂の萱草もあ  
う果てると話こめちう

○北堂又萱堂也毛詩也焉得萱草言櫛

之背注萱草令人忘憂背北堂也

何るもやうもあうとくかしの櫛うら  
肩皺あうたうあまのうらうらうら  
ちうあまのうらのうらあまのうら  
らあまのうらうらあまのうらあまのうら  
あまのうらうらあまのうらあまのうら  
あまのうらうらあまのうらあまのうら

○樂天詩也年終四十鬢如霜

大和の國あまのうらうらあまのうら  
あまのうらあまのうらあまのうら

止留淨

足之体心

○行脚、事苑也。謂遠離鄉里、御行天下、  
晚情、指累聲、訪師友、求法、證悟。

○弓也。毘尼也。弓也。心也。の奥

○意堂、解也。弓也。指聲也。心也。の奥

○身也。奉也。心也。と。奥也。心也。の奥也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○心也。心也。心也。心也。心也。心也。

○和州巡覽記也。雷麻音、又彈林寺、と。心

○用明帝、弟四皇子、麻苗子、親王の建立、と。心

○白氏集題、流溝寺古松、烟葉、葱龍、蒼

塵尾、霜皮、駭落、紫龍、鱗、欲知、松、老、看、壁

壁、死、却、題、詩、幾、許、人、と。心

獨、心、の、奥、也、と。心、の、奥、也、と。心、の、奥、也、と。

心、の、奥、也、と。心、の、奥、也、と。心、の、奥、也、と。

家安しゆらふ〜西本末を伐る東本  
ひき院くの鐘の音心の底み〜昔  
より此山み入て母を忘れし〜人ひま〜わ  
詩みのまき〜唐土の廬山と  
い〜んま〜む〜

○廬山山南康軍山北是九江郡山中  
有三百六十余寺天下第一勝地也

砧お〜我みま〜せ〜也坊み書

○朗詠み擣衣砧上俄添怨別聲○評林小

〜の山み〜  
〜のま〜

〜のま〜

評み藝の坊み〜坊書〜

この〜人昔得陽の江乃ほ〜書樂天

を信〜人書〜

古也坊〜の坊〜

〜の坊〜

〜の坊〜

〜の坊〜

〜の坊〜

〜の坊〜

〜の坊〜

澤陽の琵琶行  
古文前集也

○梅〜

西上人の草花菴の院ハ奥の院より右の  
二町たりと云けり此れ紫人の云ふ  
のりたるにまじりたるものなり  
~~~~~  
昔の草花菴の院ハ奥の院より右の  
二町たりと云けり此れ紫人の云ふ  
のりたるにまじりたるものなり

○西の法所の歌  
~~~~~

白合五元集の歌  
~~~~~  
或人云生於山家集

及撰集抄にも云えは詞調あり法所  
の詠もおもむくはとて描きおの  
~~~~~  
許由母告を耳越洗ん

○扶桑ハ日本の一名ニ車ハ山海經淮南子

山を好む坂を下るに秋の夕照小斜母  
ちうれえ名はるる所くを越して先  
帝の御廟をねむ  
法之朝事終て思ふ何を志のふま



○順徳院御製 可也也ぬき新徳の

志のふくむ程はさうはさうと

○撰集抄み新徳の信義深をおと

ちあつさうあり 月一也天むくの玉のゆ

とくもあらん後、何ふおん

大和より山城を移す 近江路みり美濃

路みもつるす山中をさすこいし 一書徳

の場は伊勢の守武、ひひる義朝殿み

似る秋風とともいひまの西の如く人

義朝又

よ 朝の心よ 秋乃風

○評林み守武、まらんよ 朝の氣性の

すゝもさるをいひて何となく心あり

一白の冷まきよ 〇句解み如向の内

海の秋風み洞を移すよ 句とる

了 歐陽永叔秋聲賦曰夫秋刑官也

於時為陰又兵象也於行為金是謂天

地之義氣常以肅殺而為心 〇説叢み弱

ハ守武、理屈をいひて今我句作

て秋風の義朝、心よ 秋乃風

よ 秋乃風 〇句解み如向の内

秋風の義朝の心よ 秋乃風

たり○梅も武子句も月とて也  
 船の里之留も人とはあ白より朝  
 敷も似る秋風と附くは附心も自  
 又て也とてふ秋風と付る船とてあふ  
 ぐ〜船と付る目とてとて船の海  
 一り〜とて義船とてまぬめとて自の秋風  
 ばよ〜船も似ると付るをよ〜魚〜  
 兵象肅殺おのり也〜は〜とて人  
 説義の流の〜とて義船も似る秋風  
 いた人も秋風も似ると船とても  
 い〜是回〜とて人〜守武の

句はあ句一附付るま〜め〜一の上ハ何也  
 似〜也ま〜とて船も似る秋風といつ是  
 のあ〜とて人とあまも似るも一〜とて  
 船もぬめも武の詞を〜とてあ〜とて  
 心〜とて字〜とて〜とて〜とて〜とて  
 事姓の船もぬ〜とて秋風とて作せ  
 ち〜とて玉代一覽〜とて中納言者  
 系信頼大將も何せ〜とて人の〜とて  
 後白河上皇は〜とて少納言入〜とて信西  
 御流〜とて信西大將ハ昔〜とて人  
 急〜とて大將も成〜とて信西頼

夢う位西をささる人しりし朝をささる  
義朝勢もあつて清盛をささる人と同  
心す平治元年十二月辛酉大將ふさ  
合戦す信賴誅せしむる明承正月一  
日張國也同あへ長田忠宗も殺せしむ  
時あふふあふふ朝毒常盤美人さ  
清盛女毒とささる

不破

秋風や葉もささるも不破の關

○新古今集あふふあふふ不破の關  
の松をささるし河をささるし後ささるの風

大垣あふふあふふあふふ木因うあふふあふふ  
とら氏あふふあふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

○あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

素名本當寺あふふ

あふふ牡丹あふふあふふあふふあふふあふふあふふ

○あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

子の娘み後ほきくはほほほのくまの国小  
溪みくくくくく

明本乃や白魚走らるるきり一寸

○業名の溪山と海人ら思はるるる國

の守めなる今み終すくくく○まふあつ

み業名の海をよとてふをのらきくく

あを切く梨衣とも子すくくくくく

似ら天然二寸の魚とみひた人もけ魚み

やほく人○梅もみ杜子美白小詩天然

二寸魚すれをくくくくくくく

熱田み諸社歌大み後走築地はくくきく

茅村みくくくくくくくくくくくくくくくく

流を走くくくくくくくくくくくくくくく

名のよらまきくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

○熱田三哥仙みハ神宗の茶はみくくくく

名護屋み入るくくくくくくくく

狂句本枯の身をみみみみみみみみ

○冬の小集けくくくくくくくくくく

みくくくくくくくくくくくくくくく

まみくくくくくくくくくくくくく

愛くも昔ね歌の女古は國ふたさし  
 るもたふと思ひて中ける○七部搜小  
 史冬白海雲の味はりや志るは先成  
 ちとつちさふハ女林と古人より結交  
 説きもね歌の女古とほりさるも我  
 方の心はなほいとさあぢとさるさる  
 るもね歌の女古もね歌よも交もね白  
 といふ人志好とさるさるのめとハちとハ論は  
 の心もさるさるさるよとさるさる近化後門人  
 号ね白のさるさるさるさるさるさる  
 さるさる又からさるさる○梅も史意の

惜まづのちりハ外さるさるさるさる  
 醫抄めさるね歌をさるさるさるさる  
 とさるさるさるさるさるさるさるさる  
 跋み粟といハ一書其味回つり李杜ハ心  
 酒を掌て寒山ハ法粥を啜る是れさる  
 下さるさるさるさるさるさるさるさる  
 候と風雅のさるさるさるさるさるさる  
 山家さるさるさるさるさるさるさる  
 とさるさるさるさる集天和二年ハ其角  
 選ハちる胸中故茶洗ハ女ぬりさるさる  
 新よさるさるのさるさる又ね白ハさるさる

此頃ハ句端のりやえ福の要なり御うも  
 何ちのむらんや甲おのきりひひひ  
 きしと後めひちの一字をさなき  
 おしめぬさめさしとを来抄小  
 こえん此相白の一字やん竹の  
 相我ん相白とさしとさしと  
 小文めさささささささささささ  
 の中め物さささささささささ  
 といふ事よさささささささ  
 ささささささささささささ  
 ささささささささささささ

下巻 ころらめも福退をささささささ

後相白のりやえ福の要なり御うも  
 何ちのむらんや甲おのきりひひひ  
 きしと後めひちの一字をさなき  
 おしめぬさめさしとを来抄小  
 こえん此相白の一字やん竹の  
 相我ん相白とさしとさしと  
 小文めさささささささささささ  
 の中め物さささささささささ  
 といふ事よさささささささ  
 ささささささささささささ  
 ささささささささささささ  
 ささささささささささささ

~~~~~お森のひびき 歌のの金神は歌  
母より不浄~~~~~

草枕丸毛~~~~~お木の歌

○新古今集お森隆正も~~~~~の  
夕時をぬれてお森あひる~~~~~人

~~~~~お森あひる~~~~~

市人~~~~~お森の傘

○笈日記お抱月亭と~~~~~お人由  
つて是は~~~~~人のまゝの~~~~~

報のれ梅抱月と~~~~~○老子曰美言可

以市尊行可以加人

旅人を~~~~~

馬越~~~~~お森の~~~~~

○笈日記お~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

~~~~~お森あひる~~~~~

以陀傳名~~~~~

海をよめること

海をよめること 鴨のまをにやまら

○古今抄の 鴨のまをにやまら 佐木の丹山がよめる

海をよめる 鴨のまをにやまら 佐二幸の

天和の比のゆくと 是亦ハ 佐の世やうと

求めよとて 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

○素のまをにやまら

のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

○山家集の 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

○梅のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら

よめること 佐のまをにやまら



あまのやぶの修けを皆たす

○二月堂ハ羅素院と号す本堂ハ觀音  
菩薩の升りて居候の玉手香炉神燈伽  
藍をまつまふと云一とせ早しとありて  
井の布をくみくま候の方みむるは  
あまのやぶ毎年二月十日初之の  
と云ありて垢齋場と云一書とあり  
はつと集小みと云とありて  
系めたりと云と井秋風と云候  
をいふ

梅林

梅のまきと云候をいふ

○林和靖傳梅林公通字君復結廬西湖之  
孤山賜謚曰和靖先生筆談曰林逋隱居  
孤山常蓄兩鶴縱之則飛入雲霄盤旋久  
之復入籠中逋常泛小艇遊西湖諸寺有  
客至童子出應門延客開籠縱鶴良久逋  
歸常以鶴飛為驗○林和靖詩疎影橫斜  
水清淺暗香浮動月黃昏○素堂評其  
梅云梅之在西湖者其花之香也  
梅之在西湖者其花之香也

ころ羨むくけ乃白のしめぬらんり  
かゝらるるなり ○吉束抄みきすか云  
古義集みは白を返けて先師のこを  
ちうしつとは白を返してしつとを是ホき物  
の心を難くせん毎んき白つわいやみ物  
とや秋風う返返のふあみせぬ書中を  
き山家み国みして詩奇をたのし  
證人をききるとすてうきみむころ  
言みまると風證証人の人と思ひたさみ  
よりみはれき先師の心み偏論をうし評者  
の心み偏論ありま後志をし掲げとも

しははをひくやけ評をさるるぬら偏論  
らるるのをしきさう欺くぬし誣らるる  
又白練の物くさしきさるる白の風さる  
子亥一巡の後評とさるるあをさるる  
櫻乃木の花みう海さるるぬ海さるる

○勢田三奇仙み一家すう出をさるるさるる  
つたと秋風う返返あり ○吐綾鶏集み社風  
のふあみさるるさるるあをさるる ○説垂取み  
櫻の花の白とせさるる誤りく

伏見西岸寺任口上人みをさるる  
あきぬあぬしこの櫻の白とせさるる

○浄土宗西岸寺三世寶譽上人俳名任日  
大津ありきりきり山崎をくえて

山路来りきりきりやゆきゆき

○素堂評山崎来りきりきりきりきり  
たぐけきりきりきりきりきりきり

○昔の相原山崎山崎山崎

されーをみり人覚来りきりきりきり

有房々の山崎山崎山崎山崎

といきりきりきりきりきりきり

人の山崎山崎山崎山崎山崎

川をきりきりきりきりきりきり

つねにきりきりきりきりきり

湖名の眺望

うらたの松をきりきりきり

○新法集山伏見きりきりきり

いりきりきりきりきりきり

侍とてきりきりきりきり

ハ大津尚らきりきりきり

熊とてきりきりきりきり

のきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきり

侍とてきりきりきりきり

中ちの秋山みちけつこも是米のさつひも  
如きとおほい道一人さしてける誠心  
佛僧の骨髄をひきれとも多うらうら  
切草ちりしきと名人の極めんさ  
の姿をまぬるとゆきしちめれ不審  
しんさきめ哉と申のさうよめらるの  
才を極つてふらうと志しきまら  
○さうちやうちのまらうのまらうと  
かくいさちしちめれしちめれしち  
とらさきとていしち極徹しち  
のけらと白中の白他め的苗ちらうら

此篇を再び読みし中述作れく一句の句を  
みおわるといふこと但ち方寸おしくよ  
ふふちりしちしち極徹のうらふ  
節とめとていしち極徹のうらふ  
只眼あちらうらちめれしち

水はみそ二十歳を経て故人みまら  
翁名しち中め生しち 梅うら

○宋之間、詩、十年々歳々花相似、歳々  
年々人不同

伊豆の國軽々小島の葉門是も去年の秋より  
けしちしちめらるしちしちの秋のさつしち

ふもと屋張の國了を流を志しひ來りぬれん

○桑門・沙門の言柄を云法恩珠林也詳也

いさしとてお種妻のうらみ人 三千はくらくら

此僧印丹告て曰圓覺寺の大顛和尚の  
睦月のそとめ近化志のうらみはもやその  
心地せしむるはるつさくは女角の許一やも引

梅くしとつおの花おせぢうくくく

○鎌倉圓覺寺大顛和尚俳名外呼い

其角は沙とすくくの新山家集めえん

梅くし睦月の近化志にお目めをすくく

ゆ梅くしとつ衣おむとてゆきもく人

杜國おれく

白芥子

らけくくくくくくくくくくく

○杜國はるめを紙むつりかき門人きり

くくくくくくくくくくくくくくくく

とくすくく

牡丹蕊くくくくくくくくくく

○幽篁集おのやの舞ひあつてお子種を

おくく相系くくくくくくくくくく

く思ひくくく牡丹蕊をくくくく

くお妙はくくく引きく菊の葉をく

流のひくくく相系とくくくく

甲斐の山中めづりあり

り弱の妻よちかたむしやうらむ

○甲斐ハむし弱ハるはる國之○東坡紀行

の詩小近山辭麥早

お目お末為め松のつと枝をさへては中よ

ちうつ名いよく風浪ゆる山くさく

○東坡詩小窓前捻半風

那をさく〜紀行翠園抄終

去来の女寺勢をさへては中よ

何く〜妻よちかたむしやうらむ

くま〜お目お末為め松のつと枝をさへては中よ

葉松也 多めはももの〜海小 南総 輪之

長〜葉の花見も〜閑古多 雨亭

隙の〜もさへては中よ 椿叟

海鷹〜はり〜母〜ゆる 松也 牛呂

棟草の〜はめも〜を〜呼牛

く〜も〜お目お末為め松のつと枝をさへては中よ 么交

互山〜逢〜人〜も〜湯の白〜 一醒

朝酒めそののの朝の岩は流 洛 木海

とけしきをかきききき 上毛 可良

うしきを老をききき 武藏 陽水

小き鼓のこけけ 徐梅

香松 兔明

杉田 金沢

青梅の末も 萬岳

下馬や 素笛

おの花 揚州

うしき 也 好

扇ふも 左 右

まは月 蓬 多

門口 き 感

たつ 喜 朝

移 筌 甫

巻 桃 瑞

お 一 瓶

夕 其 水

女目もみこ海うらまきうら十五

兔一

京の地よりきく給のりきり

扇社

只みさく異うらまきをいふれくも

素蝶

著きりたてみきりうらかきり

麦風

まきりてけりけてもあきり云々

松雄

地瀬の灌佛

旅通おれあきりてりきり花法堂

桃隣

山もみけりりりりりりりりり

菊社

けりりりりりりりりりりりり

雪洲

は夕鬼み喰まきりりりりりり

又也

さきもあきり世もいりりりりり

扇山

あまの夜海あきりりりりりり

桐栖

かきりりりりりりりりりりり

舞光

さかみれやこのりりりのきりりり

喜游

すくもまの眼みきりりりりりり

環阿

海辺にて海うらまきりりりり

金堤

芙蓉樓 當坐

木のまきりりりりりりりりり

一茂



三ちうしつる舟花抽やほひの露 一甘

松の葉てちうしつる舟花抽やほひの露 一扇

すしつる舟花抽やほひの露 二化

舟花抽やほひの露 一舟

舟花抽やほひの露 一舟

舟花抽やほひの露 一舟

舟花抽やほひの露 一舟

舟花抽やほひの露 一舟

舟花抽やほひの露 一舟

山花抽やほひの露 密仙

舟花抽やほひの露 廣陵

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

舟花抽やほひの露 一芦

稲妻やうのやうに人へまは  
 葉草のつらき秋のたぐ  
 秋のやうに秋のたぐ  
 夕空のむらさき  
 雲の目ももちうく  
 夢草やうのやうに  
 儉校少校のやうに  
 くらひをいはせぬ中  
 穉穉也。いはせぬ  
 葛三  
 占波  
 敦積  
 月影  
 黛松  
 洞  
 大旭  
 二由  
 柯草

清浄せうにけしめな  
 十六夜に飯のつらき  
 人のあつた秋のたぐ  
 吾もけしめなけしめ  
 秋のたぐにけしめな  
 煙のたぐにけしめな  
 龍のたぐにけしめな  
 庭のたぐにけしめな  
 龍砂  
 白逃  
 龍砂  
 幽嘯  
 丘高  
 巢居  
 乙二  
 雨籟  
 曉雨  
 武藏  
 越後  
 伊勢  
 陸奥

萩の葉をむらさきももるは萩の香  
拂ふ葉のまらぬ門の新酒が  
況子しそぬるまゝももるは萩の香  
松風ももるまゝももるは萩の香  
梅ももるまゝももるは萩の香  
三井寺の松ももるは萩の香  
みどりももるまゝももるは萩の香

完来  
素玩  
一峨  
梅亭  
枕載  
鯉曉  
凡魯  
子州  
指月

七文七葉ももるは萩の香  
葉ももるまゝももるは萩の香  
そらももるまゝももるは萩の香  
秋のほつさ葉ももるは萩の香  
山伏の山ももるは萩の香  
萩の葉ももるまゝももるは萩の香  
志くももるまゝももるは萩の香

久藏  
謀圃  
枇杷  
暮草  
棋壽  
佛奴  
成美  
道彦

さくらおのゝをいしとめさう

志月

あふるをいしとめさう

春樹

十月のよをいしとめさう

女  
五子文

狐ももさうとめさう

無未

伴法標の月夜もさうとめさう

橋之

一高の板も橋もさうとめさう

清已

かきくもさうとめさう

一澄更

志をた

あゆむもさうとめさう

表丁

山もさうとめさう

知足

かきくもさうとめさう

双雀

風もさうとめさう

五十二

まはるもさうとめさう

孤月

海もさうとめさう

宇櫛

舟もさうとめさう

巢北

楳もさうとめさう

氷悪

臍もさうとめさう

三化

夢もさうとめさう

鬼眼

あふるもさうとめさう

一茶

臘裏風光被火迎

錦標如高如...

北総

箱房

...

かつら

山寺...

相模

春風

春...

玉珂

浦...

澧水

...

...

...

替中

...

吳橋

...

...

...

母居

杉長

...

南総

有喃

...

可木

...

肥後

對竹

...

伊豫

護物

...

山...

大坂

長齋

...

升六

梅のついでにわらわらもつら梅の香

武藏

白芥

柿の本お中の様をさうみさうり

蟻六

梅の香のついでにわらわら梅の香

宗瑞

うらまゝ家母様もさうさう梅の香

川堂

梅の香のついでにわらわら梅の香

似風

うらまゝのついでにわらわら梅の香

五嶺

うらまゝのついでにわらわら梅の香

素雲

うらまゝのついでにわらわら梅の香

松風

うらまゝのついでにわらわら梅の香

白英

うらまゝのついでにわらわら梅の香

三光

うらまゝのついでにわらわら梅の香

雪花

うらまゝのついでにわらわら梅の香

一志

うらまゝのついでにわらわら梅の香

山奴

うらまゝのついでにわらわら梅の香

化一

うらまゝのついでにわらわら梅の香

桃舎

うらまゝのついでにわらわら梅の香

一河

うらまゝのついでにわらわら梅の香

尺草

うらまゝのついでにわらわら梅の香

音人

上毛

加賀

三三

三三

おまへは海にひらひらと

尾張

梅間

とくはあつめは由母子りおまへは

砥屋

まはらまきそらと思ふまきまき

竹有

つらねの梅おまへは

相模

白帯

赤梅おまへは

宜頂

まはらまきそらと思ふまきまき

梅間

まはらまきそらと思ふまきまき

長松

おまへは

文路

まはらまきそらと思ふまきまき

芝英

押はらまきそらと思ふまきまき

山の岡

徐来

おまへは

南総

天兒

おまへは

嵐尾

おまへは

亀水

おまへは

徹固

おまへは

おまへは

おまへは

伊勢

摺堂

おまへは

北総

雨塘

おまへは

山第

か計詠ふ由我もふ於葉の似ては

萩山

山けみすはけしのほろひをうま

之鑑

そ兼異あゝささきをさすらしきや

一甘

春の那えひらりとさるるを小ね

花の

河針木のまをさるるをさるる

桂芝

雲をさるるをさるるをさるる

去雲

留まらざる物のまをさるる

雲水

煮迪

物まけや達士の眼をさるる

北二

と詠気の泥み砕らるる

一徑

初より入れたる人らうまを結付て

一燈

湯田川

かたうりけ葉あさめぬらるる詠

太節

晴るの雨はひらりするの濃素

甲斐

漫

本母寺へさるる目さるるを春のあ

越後

竹甲

茶女をまの甲に結つくをさるる

常陸

道津

うらやめ梅げら／＼とさるる

洛

雪雄

さるる葉よ／＼とさるるをさるる

伊勢

橋堂



舊友葛齋居士の大祥忌の集子  
 のはむいせき

捨らまゝし勢も拙れおひ

恒九

重あふんらそく白木換く山

三化

海飯の折鋪みまの白く世

九

るりくしの鳥帽子ちうらる

化

あうらうく月の夜をこぼる

九

群れをるるをききぬ

化

秋風の海を走る鐘の歌

全

いつをたそひ合ふく袖

九

下姑句をよみぬる鐘の歌

化

うらの細代に証をたつけ

九

捨らまゝし佛母香を結ま

化

琵琶を入るる唐櫃

九

標きまらるる月の夜を

化

誰より娘のまはれを

九

ふらふらも表まらるる

化

海老のちまき菓を弱を  
 牛乳のちまき菓を弱を  
 金魚のちまき菓を弱を  
 いかたのちまき菓を弱を  
 いづくもたのちまき菓を弱を  
 只ちまき菓のちまき菓を弱を  
 細巻のちまき菓を弱を  
 袴のちまき菓を弱を  
 りちまき菓を弱を

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

皆ちまき菓を弱を  
 干巻のちまき菓を弱を  
 早稲のちまき菓を弱を  
 麻のちまき菓を弱を  
 小生地のちまき菓を弱を  
 葉のちまき菓を弱を  
 ぼろのちまき菓を弱を  
 湯のちまき菓を弱を  
 紙のちまき菓を弱を

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

板野の蒜の石を擲るは  
 衣の石ははるまは蝶と時勢  
 扇の石は氷きたるは  
 九 化 九

追加

有樂 荀郷  
 有樂 荀郷  
 一朝 荀郷  
 山峯 荀郷  
 東之 荀郷  
 電毛 荀郷  
 月峰 荀郷  
 蒼乳 荀郷

手紙

三

河やめ矣 女まゆらうし 如きし袖

瓦全

確あうらうし せらるし 子影

定雅

果ちてらうし ちるまを 人なほ

信濃

帛杖

交り目人 女まゆらうし 自相ちり

駿河

武白

花うきや ちるまを 女まゆらうし

播磨

菅雅

あうらうし 秋まゆらうし 女まゆらうし

土佐

玉屑

まゆらうし ちるまを けり 女まゆらうし

奇源

後

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

あうらうし ちるまを けり 女まゆらうし

Handwritten cursive text (sōsho) in Japanese, consisting of several vertical columns. The characters are fluid and connected. At the bottom right, there is a red square seal impression with the characters "高梨" (Takairi) in seal script.

三都

書肆

|         |         |         |    |    |          |          |           |             |           |        |        |        |       |        |        |       |     |        |         |
|---------|---------|---------|----|----|----------|----------|-----------|-------------|-----------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|-------|-----|--------|---------|
| 同横山町三丁目 | 同浅草广徳寺前 | 同本石町十軒店 | 同芝 | 同所 | 同日本橋通二丁目 | 同浅草茅町二丁目 | 江戶日本橋通一丁目 | 大坂心齋橋通北久太郎町 | 京都寺町通松原下町 | 勝村治右衛門 | 河内屋喜兵衛 | 須原屋茂兵衛 | 須原屋伊八 | 須原屋新兵衛 | 山城屋佐兵衛 | 岡田屋嘉七 | 英大助 | 和泉屋庄治郎 | 和泉屋金右衛門 |
|---------|---------|---------|----|----|----------|----------|-----------|-------------|-----------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|-------|-----|--------|---------|

書報

三精

同對以...  
...  
...

同美草...

同本...

同...

同...

同日本...

同...

同日本...

同...

同...

同...

同...

同...

同田...

同...

同...

同...

同...

同...

同...



和書大蔵  
第五卷

